

『勇者たちに毎日セックスで魔力補給がんばりますっ！』ゼル編
ー見本ー

ノアたち一行は無事、次の目的地である町にたどり着き、2日目の朝を迎えようとしていた。そして、ノアはこの2日間あることに悩まされていた。

「あつ、…んっ、う、も、もう、朝ですよ、アンドリユー様っ」

「はッ、ハッ、そうだなっ」

夜明けになろうというのに夜間に始めた魔力補給の儀式を、アンドリユーは終わらせてくれる気配がない。きしむベッドの上で何とか逃げ出そうと這おうとするノアの腰を掴み、そのまま上から体重をかけるように押し掛かり無遠慮に腰を揺すられる。

「あっあっああくっ、もう、魔力補給は、すんできますうっ」

必死に抗議を訴えるも、アンドリユーは熱い肉棒でノアのぬかるんだ蜜壺をぐちゅぐちゅと音を立てながらピストンしてくる。そろそろ射精を促されているのか動きが速くなってきた。

「あうっ、う、あつ、こんなのダメですうっ。こんなッ、あッ」

「こんな、何？」

突然耳元から熱い息に交じって熱量の交じった言葉がささやかれる。またこれだ。最近ノアを悩ませているのは、このアンドリユーの熱のこもった言動のせいなのだ。本来は魔力補給の目的のための儀式であって、今のアンドリユーがもたらす快楽を共有するためだけのこの行為はまさに…

「セックス、みたい？」

耳をじゅるっと舐めしゃぶられながらささやかれると、背筋を甘い痺れが走り肉棒を加えこんだ後ろがきゅうっと収縮した。